分野別研究組織成果報告（2014 年度）

東アフリカ高地におけるアグロフォレストリーの発達と在来知の関係

Development of Agroforestry and Local Knowledge in East African Highland

佐藤　靖明（SATO Yasuaki）

高い人口密度を擁する東アフリカ高地には、バナナを基幹作物とする集約的農業地域が広がっている。本研究は、その地域のバナナを含むアグロフォレストリー（樹木とほかの作物が混植される集約的な土地利用形態）の発達と樹木に関する住民の知識がいかなる関係にあるのかを明らかにするとともに、彼らの「在来知」がコミュニティの外からの知識やモノを取り込む動的な様態を追うことを目的とした。

樹木とバナナが混植される畑が慣習的につくられる共通点を持ち、標高、民族、土地利用体系、人口密度等の異なるウガンダ南部と西部の農村において１カ所ずつ調査サイトを設置した。そして、南部では各世帯の畑の毎木調査、住民インタビュー、約 10 種の苗木の配布・栽培試験を実施し、樹木の栽植に関する人びとの嗜好や栽培戦略、実践について調べた。西部では、土地利用の状況、各世帯の栽植樹種、バナナとの混植において良い／悪い樹種とその利用法についてのインタビュー調査を実施した。その結果、大きく以下の２つのことが明らかになった。

１．樹種の選択基準と栽植のパターン

少数の樹木種については、バナナとの栽培上の相性にかかわる知識が広く共有されていた。しかし、アグロフォレストリーの様相には地域間、そして世帯間において大きな違いがみられた。その要因として、畑の土壌の肥沃度、慣習、利用法に関する知識、自給／販売への志向性の違いが考えられた。なお、一部のかんきつ類については、近年極端化しているといわれる気候の下でもよく生育し、自給、販売ともに高い潜在的需要があることが分かった。

２．苗木の配布と育成をとおした住民の意識・知識の変化

南部の調査サイトでは、約 15 世帯に苗木を配布することを２年間（２回）続けておこない、各世帯で幼木を育ててもらった。このことをとおして、人びとの間でアグロフォレストリーのメリット、ひいては樹木栽植への関心が高まっていくことが分かった。さらに、住民間や住民と研究者の間で、潜在的な知識や意見をスムーズに交換できる関係もつくられた。そして、その影響は幼木を育成した住民だけでなく、それを近くでみてきた周辺の住民にも波及することが分かった。「樹木」という目に見える形での配布・育成は、周辺の社会へのインパクトが長く続くことが示唆された。

なお、本研究の過程において、アグロフォレストリーを含む作付体系と食文化における嗜好の両方が人々の主食作物の種類に影響を及ぼしていることを考察した論文（Sato 2012）を刊行した。

Yasuaki Sato "Selection of Principal Starchy Food in a Livelihood System Based on Bananas: The Formation of Food Culture in Buganda, Central Uganda." *Nilo-Ethiopian Studies*, 17, 2012, pp.51-62.